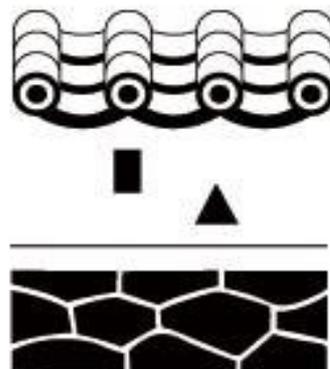


OGO 第82号

小田原ガイド協会だより

令和元年 12月1日発行 (冬号・季刊)

NPO 法人 小田原ガイド協会 〒250-0014 小田原市城内 3-22
TEL 0465-22-8800 FAX 0465-22-8814
ホームページ URL <http://www.odawara-gaido.com>



戦国都市

小田原研究のいま②

研究の位置づけとこれから

佐々木 健策

前号で述べたように、研究を大きく進める契機となったのは考古学の成果でした。

小田原城周辺では、六〇〇箇所におよぶ発掘調査が行われています。「諏訪問二〇一八」しかし、個々の調査は点的で、戦国都市小田原の全体像を考へ得るだけの成果は得られていませんでした。そのような状況で参考となったのが、一乗谷朝倉氏遺跡(福井市)をはじめとする全国の遺跡の調査成果でした。中世考古学の第一人者である小野正敏氏は、一乗谷での発掘調査成果を中心に、戦国時代の都市像を明らかにされてきました。「小野一九九七など」小野氏により提示された一乗谷の姿は、戦国都市・館の典型例と評価され(朝倉モデ

ル)、筆者もまた小田原でも一乗谷のような姿が確認できるものと想定し、解明方法を模索してきました。

そして、断片的な検出ながらも都市区画を示すと評価できる遺構(道路・堀・溝など)を抽出・分析することで、都市の姿を明らかにしようとしてきました。その結果、十六世紀代(十七世紀初頭を含む)に埋没した道路・堀・溝などが、およそ正方位を基軸としていた

ことを明らかにすることができ、小田原には方格地割の町割が存在したことを明らかにしました。「佐々木二〇〇五」これは、文献史学の仁木宏氏が、地方勢力が方格・方形のプランを採用することで自らの「権威」を示し、こうあるべきとの規範性を示したと想定していることとも共通します。「仁木二〇〇六」さらに、史跡小田原城跡御用米曲輪の発掘調査で確認された戦国期の庭園は「佐々木二〇一六」、将軍家あるいは京都の権威を示すとされ「小野二〇一八」、北条氏が「伝統的な景観を志向した」事例と評価さ

れました。「小野二〇一七」

小田原は、長らく全国の遺跡の成果を追いかけて調査・研究を進めてきましたが、一〇〇年に亘り複数ヶ国を領する北条氏が本拠とした小田原は、時系列で戦国大名の考え方や志向性の推移、それに伴う都市の変化が検討できる事例として、全国的にも重要視されつつあります。

調査の進捗・研究の推進により、評価や解釈は様々に変化します。近年の黒田基樹氏の一連の著作「例えば黒田編二〇一五・黒田二〇一九」などは良い事例ですので注意が必要で、ぜひお読み頂き、今後の研究の動向にも注視して頂けると、新たな小田原研究の未来が見えてくると思います。

引用文献

小野正敏 一九九七『戦国城下町の考古学』講談社メチエ
小野正敏 二〇一七『館・屋敷をどう読むか―戦国期大名館を素材に―』『遺跡に読む中世史』考古学と中世史研究13.高志書院

小野正敏 二〇一八「戦国大名と京都―小田原北条氏の権威演出―」『小田原北条氏の絆』小田原市・八王子市・寄居町姉妹都市盟約記念シンポジウム、小田原城総合管理事務所

黒田基樹編 二〇一五『北条氏康の子供たち』宮帯出版社

黒田基樹 二〇一九『戦国北条五代』、星海社新書

佐々木健策 二〇〇五「中世小田原の町割と景観」『中世のみちと橋』、高志書院

佐々木健策 二〇一六『史跡小田原城跡御用米曲輪発掘調査概要報告書』、小田原市教育委員会

諏訪間順 二〇一八「小田原北条氏のイメージと小田原城」『小田原北条氏の絆』（前掲）

仁木 宏 二〇〇六「室町・戦国時代の社会構造と守護所・城下町」『守護所と戦国城下町』高志書院

回遊バスで巡る 小田原再発見ツアー

森尻 義雄



小田原宿観
光回遊バスは
十三年前から
運行されてい
ます。

当協会のガイドが添乗してガイド兼車掌的な役目を果たしているのは全国でも小田原市くらいではないかと思えます。小田原観光に回遊バスが果たす役割は大きいなーと実感しているところです。

ただお客様の降車場所の実は一晩城と漁港で全体の八五％程度を占めていること、他の五か所の停車場は全部足しても十五％未満に過ぎない現状。回遊バスが回遊する本来の目的を十分に活用できていない。効率的に利用して、多くの名所やなりわいを経験していただく、利用の仕方をお客様と一緒に実践してみよう、と五人で組織する回遊バス委員会を検討した結果、降車率の比較的低い本町・板橋・文学館の魅力の発信に注力を注ぐことにし、Aコースを板橋―一夜城―文学館―小田原城、Bコースを本町―漁港―文学館―小田

原城の二つのコースを設定。運営はすべて委員会にて行うこととし八月三日に一回目、好評のため二回目を九月二八日に実施。旧松本剛吉邸を昼食場所として利用させていたことができたことも幸いでした。バス内のガイドは本来の添乗ガイドが行いますので、当企画のガイドは降車後一時間程度で四か所・四回のガイドを行いました。板橋では和菓子で休憩、本町では揚げかまでひと休み。

回遊バスを利用することにより個人で歩いたらとても対応できない広範な地域に点として存在する小田原の魅力と線として結び、お客様に無理なく三か所＋小田原城を体験していただくことができました。回遊バスでの回り方を含め評判はかなり上々でした。当ツアー参加されたお客様からの要望の多かった漁港での食事を楽しんでいただくために、次回以降は漁港にて解散する半日コースの定期的なツアーを計画する予定です。

◆企画ガイド◆ 小田原馬車・電気鉄道の軌跡

小田原湯本

戸田 博史

鉄道は男にとってロマンだ。それは、いくつになっても変わらない。小田原の古き良き時代に、馬車鉄道や電気鉄道が走った。それを想像するだけでワクワクする。というわけで、応募者のほとんどが男性かも？という「二日間完全踏破」の企画がスタートした。

まずは下見会。コース決めも含めて現場を検証する。今回も新発見がいくつかあった。

例えば、駅前ビル群。なぜか道に面して斜めに立っている。そのわけは？なるほど、大正・昭和の古地図を見るとその理由がよくわかる。

箱根湯本に行く。終着駅のループの手前、早川を渡る落合橋案内版のところ、古い写真と見比べる。ほんの少しだが背景の山影がズレてる気がする。橋の架かっていた位置は、ここがいいのだろうか。

われわれは、前日の雨でぬかるむ道を奥へ奥へと進んでいった。すると写真と同じような場所があった。古い簡易地図と照らし合わせてみる。うーむ。ひよっとして落合橋は、ここだった可能性がある。

その他、箱根板橋駅への引込み線の場所とか、旧東海道の位置とか、写真や地図を見比べながら、ケンケンガクガクの議論は続いていく。やっぱり現場に出るのが一番。一人じゃわからないことも、みんなで見え出し合えば見えてくる。

そして勉強会。最近、勉強会での質問を避ける傾向があるのは、なげかわしく思える。身内の違った角度からの疑問に答えてこそ進歩や発見があるはずだ。

で、本番は、天気さわやか、体調OK。無事に終わって――

後は楽しい打ち上げだ。企画ガイドが充実すれば、打ち上げの酒席もまた楽し。今回の企画委員は男三人女三人。合コン形式のハッピーアワーは、昼間から盛り上がり、WEAR HAPPY。

◆企画ガイド◆

小田原馬車・電気鉄道の軌跡

国府津く小田原

濱村 哲夫

雨で二週間延期した十一月二日、秋晴れの中、残念ながら延期により減少してしまつたが、参加者二十一名で実施した。延期により、国府津く小田原と小田原く湯本までのガイド日程が逆転してしまい、旧本社があった東京電力前でようやく話がつながつたと話す参加者もいた。

今回、企画を実施するにあたり、なるべく電気鉄道に絞つてのガイドをしようと、資料集めを行った。電気鉄道の後継会社は、箱根登山鉄道であるが、問い合わせでも、大正十二年の本社火災、続いての関東大震



国府津駅前

木菟のささやき

湯本の吉池旅館の一角に「箱根電燈発電所跡」の説明板がある。明治25年、ここに須雲川水流を利用した水力発電所が開設された。京都について2番目。タービン、発電機など国産機の使用ではわが国初の水力発電所だ。湯本と塔ノ沢の旅館街26戸200灯の電気を供給、文明開化の灯が箱根にともった。

初期の容量はわずか20KWほど。アンペアに換算すると200Aで、現在の家庭だと4～5軒分もない。そんなに少なくてもいいのかもしれないが、パソコンもテレビもなく、洗濯は手で炊事は竈の時代だから、それで充分だったのだろう。

エジソンの白熱電灯が実用化された2年後の1881年に、世界初の事業用水力発電所がアメリカで竣工された。箱根の水力発電所は1892年の開設だった。約10年で欧米に追いついたのだ。明治の西洋文化進取の力は凄まじい。(T)

災により、会社にもそれ以前の資料がほとんど残っていないとのことで、細かい疑問点が何点か解らなかつた。例えば、停車場の表示はどのようなものであつた、ポイントの切り替えはどうしたのか、単線運行でダブルレックトは使用したのか等々。

沿線の寺社仏閣など交通に關係のないものについてはなるべく少なくし、停車場があつた地点の説明や、沿線の交通に關連したものをメインとしたガイドを試みたが、残念ながらなかなかそれだけでは難しく、多少いや半分くらいは電気鉄道と關係しないこともガイドせざるを得なかつた。参加者の関心に対応出来たかどうか。また、国府津駅前で、馬車鉄道開通に合わせ、待合茶屋として開業し、現在もレストランとして営業していた相仙が十月三十一日をもって営業を終了してしまつた。おとといまで営業していたんですが、とガイドせざるをえず、時代のながれとはいえ、歴史ある店がなくなり、とても寂しい気がした。

城跡にひとり

男がたたずむ

第二回語り手 湯山 尊明

▼お生まれは？

昭和十九年の一月です。勉強よりも遊びが大好き。毎日、川に行ったり、山の中を走り回ったり、チャンバラごっこに没頭したり、そんな少年でした。

▼お城の勉強を始めたのは？

三十歳頃かな。その頃は写真会社の技術系サラリーマン。企業戦士として働いていました。当然、休みも今ほどありません。東京本社勤務の頃など、終電のそのまた後、夜行寝台列車「銀河」のデッキに乗せてもらって、小田原まで帰り、家に戻って少し寝て子供の寝顔を横目にまた出勤。そんなことがよくありました。



今年の2月にできた
河村城展望四阿
(山北町 HP より)

それでも、暇をみつけてコツコツと城郭関係の本を読み、城跡を歩きました。休日になるとひとりで家を飛び出し、この近辺の城を巡りました。一夜城、足柄城や河村城とか、このあたりは隅から隅まで行ったかな。特に中世の城、山城が好きでした。そのうち出張の折などを利用して、全国各地の城を巡り始めました。いろいろな城の研究団体に所属するようになったのは十数年ぐらい前から。通り一遍ではなく、きちんと研究しようと思ったからです。

▼最初の頃、印象に残った城は？

河村城かな。とても想像をかきたてる城です。今みたいに整備されていないから、草ボウボウの荒地で、男がひとりポツン

と縄張り図を握りしめ、城跡を眺めながら、感慨にふけったりニヤニヤしたり……まわりから見ると変な奴だったでしょうね。ともかく現場に行く。本などで得た情報と突き合わせ、じっくり観察する。資料と現場、どちらかに偏ってもいけないと思ってます。

▼奥さんや子供さんは文句を言いませんでしたか？

うーん……当時の風潮としては、男は外で働くもの、家にいるのは怠け者みたいな感じでしたからね。今じゃ、とても通用しないけど。

▼湯山さんといえば、勉強会の時など、草原でも藪でも、鎌を手に先頭に立ってドンドン進むイメージがありますが。

ガイドの時は、危険な道にお客様を連れていくわけにはいかない。でもそれを知っておくと遺構を多面的にとらえられる。それだけガイドの幅が広がるわけです。

若い頃から、藪をかき分け進みました。山城巡りの七つ道具をかかえてね。

▼七つ道具というのは？

縄張り図、磁石、手袋、巻き尺、鎌、杖、それにカメラかな。杖はつくためではなく、草や蜘蛛の巣などを払うため。それに登山の知識も必要だ。靴は必ず登山靴。藪に入りますからね。昔、僕は「晴れ男」でした、撮った写真の背景は、みんな青空です。ガイド協会に入って「雨男」といわれるとちよつと悲しい。(笑)

▼小田原地方の城郭は、昔と比べると、どう感じますか？

今は整備されてるよね。講演会なんか開かれて、関心を持つ人も多くなった。昔は、城を調べようなんて奴は、ごくマニアックな人間だけだった。

一夜城なんかは、荒れ放題だったし、惣構えの縦掘りを、草をかき分け登ったことでもあります。当時は、ガイドのためじやなくて、自分が歩きたいために行きました。

今の小田原城は、リニューアルして、白く美しくなった。一夜城や惣構えの歴史的な意味や価値、それをもっとみんなに知ってもらいたいと思います。

(文責：編集部)

弥次さん喜多さん
小田原を歩く

岡田 秀昭

十返舎一九の本名は重田貞一。明和二年（一七六五）に駿府で中下層の武士の子として生まれた。寛政六年（一七九四）に江戸に行き、江戸随一の大出版業者の蔦屋重三郎の食客になって、洒落本、読本などを書き、次第に世間に知られるようになった。享和二年（一八〇一）に、江戸から箱根までの弥次郎兵衛と喜多八の旅の滑稽本『東海道中膝栗毛・初編』が大当たりして、巻を重ねるごとに人気が高まり、空前の大流行作家になったといわれている。

神田の八丁堀に住む妻を亡くした独り者の弥次郎兵衛と居候の喜多八、のらくら者の二人が、花のお江戸を立ち、お伊勢参りから、大和の国巡りして、

花の都（京都）から梅の咲く浪花（大阪）へと珍道中を繰り返す物語だ。

以下、現代訳文（抄）から引用する。

高笑いしながら歩むともなく、いつの間にか曾我中村、小八幡の八幡宮をも行き過ぎて、酒匂川を越えて行けば、小田原宿の客引きたちが早くも道に待ち受けて、

客引き「あなた方はお泊りでござりますか」

弥次「貴様は小田原か、おいら清水か白子屋に泊まるつもりだ」

客引き「今晚は両家とも、お泊りが一杯でござりますから、どうぞ私方へお泊りください」

酒匂川を越えたあたりで、もう小田原宿の客引きの声がかかる。当ても競争が激しかったのだらう。

町割り図をみると、小清水旅館は、宮前町の清水本陣東隣、白子屋は本町の久保田本陣の二軒東にあった。その頃の人気

宿だったようだが、結局どこに泊まったかは記されていない。二人が小田原宿に入つていくと、八つ棟造りの大きな建物の前に出る。

喜多「オヤここの家は屋根に大分凸凹間のある家だ」

弥次「これが名物いろいろの店の虎屋だ」

喜多「一つ買って見よう。うまいかの」

弥次「うまいにきまつてらア。あぶが落ちらア」

喜多「オヤ餅かと思つたら、菓屋の店だな」

いろいろを餅かと

うまくだまされて
こは菓じゃとにがい顔する

外郎は、当時から、全国に名の通った老舗だった。菓ではなく、銘菓と間違える者がいるのも現代と変らないようだ。

それにしても二人は時々、狂歌を読む。「のらくら者」というが、以外と風流人なのかもしれない。

ふたりは宿に案内され、風呂

に入る。ここの風呂は上方で流行っている五右衛門風呂だ。二人は入り方が解らず、釜の底を踏み抜き壊してしまい、弁償金を出すはめになった。これが小田原宿でのヤマ場となっている。

その他にも、小田原宿に関するエピソードが生き生きと描かれており、庶民の旅する姿や宿場町の様子がよくわかる。

弥次さん喜多さんの珍道中を読みながら小田原の街を眺めると、当時の町並みが想像出来てなかなか面白い。

静岡出版 十返舎一九の会

『東海道中膝栗毛』古文調

現代訳 第一部を参照



No.	企画ガイド	日時・集合場所	参加費	コース
1	早雲公！相模侵攻の 最前線橋地区サクサク 散歩！	12月8日（日） JR 国府津駅 9:30～14:30 頃	1000 円	国府津駅～大山道道標～史跡車 坂～広濟寺～船津家長屋門～羽 根尾史跡公園《昼食》～長泉寺 ～常念寺～国府津駅
2	小田原まちあるき （第7回）	12月20日（金） JR 小田原駅 9:30～12:00 頃	700 円	御幸の浜～なりわい
3	令和初！ 七福神めぐり	1月5日（日） 小田急線足柄駅 9:30～14:30 頃	700 円	足柄駅～潮音寺～福泉寺～鳳巢 院～蓮船寺～《昼食》～報身寺 ～大蓮寺～圓福寺（解散）
4	厳冬の箱根！冴えわ たる琵琶の音と老舗 旅館のお弁当を楽し む！	1月18日（土） 箱根湯本駅 9:30～15:00 頃	3000 円	湯本駅～茶の花碑～参道女坂～ 阿弥陀寺～参道男坂～塔ノ沢一 の湯本館《昼食》～横穴式源泉 ～熊野神社～河鹿荘前（解散）

参加申し込みは実施日の45日前です。詳しくはHPをご覧ください。

編集後記

この夏「まるう」のかまぼこ詰め放題があまりに楽しかったので、「桔梗屋信玄餅」の詰め放題に挑戦してきました。配布のビニール袋を極限まで伸ばして詰め込むこと「十八個」。心ゆくまで、詰め放題堪能しました。皆様はどのようなストレス発散してますか？（知）

編集委員 磯崎知可子（委員長）

戸田博史 中村哲夫
宮澤周子 上田信一

訃報
当協会会員の米光道子理事が十月下旬に逝去されました。長年のご尽力に感謝するとともに心からご冥福をお祈りいたします。

九月以降の退会者

椎野 二郎さん、今村 孝さん

ありがとうございます

お詫びと訂正

OG第81号記載の一部文章に誤りがありましたのでお詫びして訂正いたします。三頁四段十八行目（誤）約七十二メートル（正）約七十二メートルとも云われる

紫禁城



リレーエッセー わたしの城旅⑥
「兵（つわもの）どもが 夢の跡」

飯沼 忠雄

お城（城跡）は随分多くの所を歩いた。シルバー大学同期の仲間と天正十八年の小田原合戦時、北條氏側の支城巡りを月例として五年も続けたが、ほとんどの所は建物はなく名も知らない花が風に吹かれていたりした。

中国、北京の「紫禁城」は圧巻であった。又、ヨーロッパ、ドイツのロマンチック街道ライン河沿いの岸壁に次々と現われるお城は戦いの場と云うよりも、もっと宗教的な何かを感じた。今の私の記憶力ではどこが一番印象にのこっているのかと問われても判然としない。そんな私だが、少年の頃より一度は行ってみたいと思いつつ、いまだに行っていない城がある。岩手県盛岡市の不来方（こずかた）城である。石川啄木のこの詩が私は好きであった。
「不来方の お城の草に 寝ころびて 空に吸はれし 十五の心」

1 班

2 班

2 班

3 班

4 班

4 班

